

第11話 京都の疲弊

豪族の割拠が全国にわたって、幕府の威令が全く行われなくなったので、朝廷の衰えも甚だしかったが、歴代の天皇は、そういう際にもなお専ら万民をあわれみられた。

戦国時代には、前話に述べた北條、武田、上杉、毛利の4氏の外にも、豪族が各地に拠って互いに土地を奪いあっていた。戦争はしばらくも止む時はなかった。

奥羽地方の豪族

先づ北からいうと、奥羽地方には南部氏、最上氏、秋田氏、伊達氏、相馬氏などがいたが、中にも伊達氏は正宗に至って大いに勢力を得て、しだいに領地をひろめた。けれども、この地方は遠く東北に偏っていたので、中央の大勢には殆ど影響しなかった。

中部地方の豪族

中部地方には、駿河に今川氏、三河に徳川氏、尾張に織田氏がいて、いづれも勢力があった。(これらの諸氏については、後に詳しくお話する。) 美濃には新たに起こった斉藤氏があり、越前には朝倉氏がいた。朝倉氏は管領家の斯波氏の家老で、応仁の乱で衰えた主家を取って代わったのです。斉藤氏は、もとと油売りであった秀龍が土岐氏に仕えて、ついに主家に代わって美濃を支配したのです。

近畿地方の豪族

近畿地方には近江に浅井氏、六角氏があり、伊勢には北畠氏がいた。北畠氏は南北朝時代の南朝の忠臣北畠氏の後で、代々伊勢の国司としてその勢力を維持していたのです。浅井氏は、四職の1つの京極氏の家臣でしたが、しきりに起こった主家の内訌を斡旋している間に、次第に勢力を得てついに主家に代わって北近江を領するようになったのです。六角氏は京極氏の1家で、南近江を領していた。

三管領の一家の畠山氏も斯波氏と同じく衰えて、大和には筒井氏が起こり、河内は三好氏に奪われた。ただ細川氏だけはなお盛んでしたが、勝元の子の政元に子が無かったために、ここにもまた家督争いが起こって、家臣も2派に分かれて合い争っているうちに、しだいに勢力が衰えて、その権力は家臣の三好氏に移りました。

四国の豪族

四国はもとその大部分が細川氏の領地でしたが、応仁の乱後に、土佐に長曾我部氏が興って、しだいに勢力を得て、元親に至って、ついに土佐を定め、阿波、讃岐を侵して、細川氏の後を襲っていた三好氏を破り、さらに伊予に入って河野氏、西園寺氏らを降し、宇都宮氏を安芸に走らせ、四国のほとんど全部を領有して、その威を遠近に振るった。

第11話 京都の疲弊

九州の豪族

九州では、筑前に少弐氏がいたが、しだいに衰えて、このころは、その家臣の龍造寺氏のほうが盛んとなり、肥前の佐賀を根拠として筑前、筑後にまでその勢いを振るっていた。豊後の大友氏は、その祖能直が源頼朝の時にこの国の守護に任ぜられてから代々この地にいたが、義鑑に至って勢いが強くなり、しばしば兵を隣国に出して、豊前、筑前、筑後を侵した。また、彼は府内（今の大分）と臼杵との2港を開いて、中国の明および新たに來航した西洋人と貿易して大いに利益を得た。

その子の義鎮――髪を剃って後は宗麟と称した――もまた豪傑で、一時は九州の殆ど北半部を領したほどでしたが、後に島津義久と戦うようになってからしばしば利を失った。島津氏はその祖忠久が頼朝の時に薩摩、大隈、日向の3国の守護に任ぜられてから、連綿としてこの地に在って、勢力を養っていたのですが、とりわけ義久に至ってその勢いが頗る強大となり、ついに肥後、筑前、筑後をも略して、豊後の大友氏に迫って行った。やがて九州の全部を併呑するかの勢いに見えました。

この外にもまだ、全国の地方々々に威を振るっていた豪族を一々あげるとしたら、いくらあるかもしれないくらいです。ひと口に言えば、諸国におかれた守護や地頭や国司をはじめ、時には一介の匹夫ですらも、武略があり、智謀にすぐれたものは、ことごとく起こって自立をはかり、しだいに附近の弱い者を併せて強く大きくなると、折を見て京都にのぼり、將軍を奉じて天下に号令しようと志したのです。

ところで、全国がこういう風に、いわゆる乱麻の如くになっていた時に、幕府はいったいどういう有様でしたか？ 將軍は何をしていたのか？ 京都の様子はどうなだったのでしょ？ ここでちょっと、それらの事を見てみましょう。

將軍足利義尚

応仁の乱のまだ終わらないうちに、足利義尚が9才の幼年で起って7代將軍になった事は前に述べましたが、この義尚は、父の義政とはちがって、頗る聡明で、学問を好み、そのころ博学の聞こえの高かった一條兼良について、国を治める道を聴いたりして、文武の両道に達していた。応仁の乱の後に、義尚は地方の諸將のわがままをおさえて、幕府の威権を回復しようとして、先づ近江の六角氏を攻めたが、不孝にして病にかかり、志を遂げないうちに空しく陣中で薨じた。在職17年で、年は25才でした。

後継ぎが無かったので、東山に隠居していた義政は、使いを美濃の義視のところにやって、仲直りを申し込み、義視の子の義植を立てて世嗣とすることにした。そこで義視は義植と共に京都にのぼった。すると、幕府の諸將の中から、義植を將軍とすることに異議を挟むものが出て来た。義植は応仁の乱に西軍に擁せられた義視の子であるので、これを將軍とするのは、西軍であった人を奉ずる事となって、応仁の乱が無意味になるというのです。

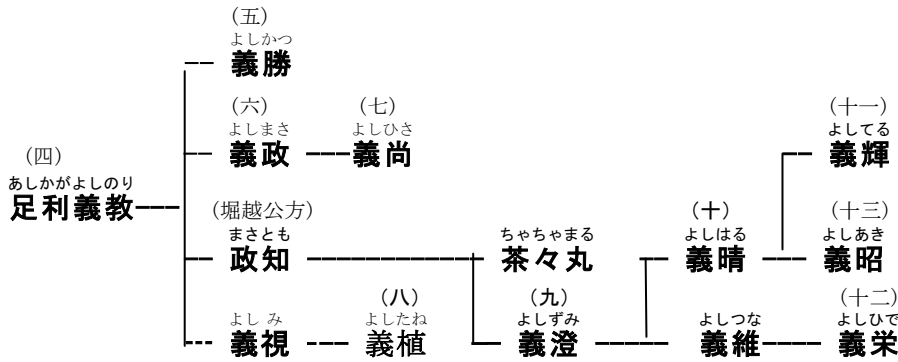
將軍義植

わけでも細川勝元の子の政元が固くこれを主張して反対しました。そこで、すぐには義植を立てることが出来なくなったので、義政は朝廷に奏して、再び自分で政治を執ることにした。ところが、翌永徳2年

第11話 京都の疲弊

正月7日に、**義政**は56才で薨じて、やはり後を嗣ぐ者がいなかったので、止む無く夫人の**富子**は諸将と謀つて、**義植**にこれを嗣がせた。その年の7月、**義植**は征夷大將軍に任ぜられて、8代將軍となった。

また、**義植**の父の**義視**は、今度、京都にのぼると、再び出家して名を**道存**と改めたが、**義政**が薨じた翌延徳3年の正月7日、53才で亡くなった。ちょうど1年遅れたばかりで、**義政**が薨じたのと同月同日でしたので、世間では不思議な事だといって話の種にした。実際に、**義視**は義理知らずの兄を持ったばかりに、不愉快な一生を送った不運な人でした。



將軍**義澄**

さて、**義植**が將軍となったころから、幕府はますます衰えて、威令の及ぶところは僅かに近畿の一部にすぎなくなった。管領家では、細川氏だけになお幾らかの勢力があつて、細川**政元**が独り権をほしいままにしていた。しかし**政元**は初めから、**義植**を立てることを喜ばなかったので、**義植**が立って4年後の明応2年5月、ついに**義植**を自分の家臣の邸に押し込めて、堀越公方**政知**（**義政**の弟）の子の**義澄**を迎えて、9代將軍とした。そこで、**義植**は密かに逃れて、越中に奔り、後に、周防に奔って大内**義興**に頼つた。

將軍**義晴**

ところが、細川**政元**にも子が無かったので、ここにもまた家督争いが起こった末に、ついに**政元**は弑せられて、その家が大いに乱れた。そこへ山口の大内**義興**が**義植**を奉じて入京し、再びこれを將軍職につけた。そして**義興**は管領代となつて、11年間これを補佐した。しばらく京都を無事に治めていたが、その領国が出雲の**尼子経久**に侵されたので帰国した。すると、細川**政元**の養子の**高国**が管領となつたが、**尼子経久**と衝突して、**義植**を淡路に逐つて、**義澄**の子の**義晴**を迎えて10代將軍とした。

將軍**義輝**と**義栄**

將軍**義晴**の後はその子の**義輝**が継いだ。このころ細川氏もまた全く衰えて、その家臣の**三好氏**が勢力を得た。ことに、**三好長慶**の如きは一時幕府の全権を握つて、一切の政治をほしいままにしたほどです。ところが、**三好長慶**が死んだ後は、**三好氏**もまた振るわなくなり、下克上の風は更に進んで、その家臣の**松永久秀**が勢力を得た。**久秀**はついに幕府の事を一切自分で好きなようにした上に、**三好長慶**の養子の**義継**と共に、11代將軍**義輝**を弑して、**義晴**の弟の子の**義栄**を立てて12代將軍としました。

第11話 京都の疲弊

時は正親町天皇の永禄 8 年 5 月で、義輝の弟の義昭は、難を逃れて近江に奔ったが、更に諸方を流浪した後に、美濃に行って織田信長に頼りました。

陪臣政治

こうして幕府の実権は、管領の細川氏の手から、さらに家臣の三好氏にうつり、またその家臣の松永氏に移ったのです。言うまでもなく、天下の政治は、本来、朝廷でなさるべき筈のものでありますから、その大元から言えば、今は陪臣の陪臣のそのまた陪臣の手で自由にされることとなったのです。武家政治の弊もまたここに極まったといわなければなりません。実に驚くべきことではありませんか。

朝廷の式微（甚だしく衰えること）

すでに幕府がこういう状態で、将軍はただ名ばかりの飾り物になってしまったのですから、地方の勢いのある豪族らとその命令に従わないのも不思議はなかった。彼等は却ってますます勢力を養い、幕府の領地や公卿の領地をも奪って、税なども納めないばかりか、はては朝廷のご領地さえ横領して、少しも租税をたてまつらなかつたのです。

ところが、幕府も貧しく、僅かに近畿の一部分から税を取り立て、或いは富める商人から金を借りて、漸くその日を送っていたのですから、幕府は朝廷の費用を奉ることが出来ません。これには朝廷もお困りになった。もろもろの儀式が行われないばかりでなく、天皇の毎日の御用にすら事を欠くこともありました。

況して御所につとめる公卿らの困苦はいうまでもないことでした。参内するにも車を用いることが出来ず、徒歩でまいったりしたのも初めのことで、やがて京都には住むことさえも出来なくなつて、多くは縁を求めて地方に下り、勢力のある豪族のところに身を寄せて、世話になった。周防の大内氏の如きは、殊に多くの公卿を養ったので有名です。

公卿の困苦

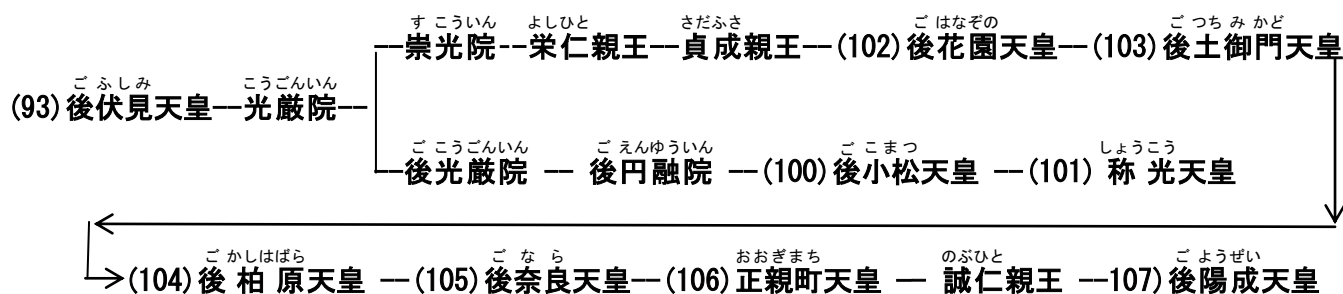
しかし一方で、京都に居残った公卿の困苦は、更にますます甚だしくなるばかりでした。それについて次のような挿話も伝えられています。——ある時、常磐井という公卿に面会を求めた者がいました。取次ぎの者が、「この寒い時候に夏の服では恥づかしいと仰せられますから」といって断るのを、「左様なことは一向に構いません」と、座敷に通ると、主人は素肌に蚊帳をまとって会われたという事です。いかに当時の公卿がひどい生活をしていたかがわかります。——

後土御門天皇

しかも、こういう際にも、歴代の天皇は、御身の困難は顧みられずに、専ら万民をあわれまれた。第103代後土御門天皇は御父後花園上皇と共に応仁の乱を避けて、室町の將軍の邸を仮の御所とされた。やがて上皇がここでお崩れになった後も、そのままそこにおられ、皇居にはおられぬことが10余年にも及んだ。この間にも、大乱の早く鎮まるように、天変地異のないようにと、しばしば世の安穩を神社や寺院に祈られた。明応9年9月、天皇は御年59才を以つてお崩れになったが、この時、葬儀の費用を幕府が献上する

第11話 京都の疲弊

ことが出来なかったので、御遺骸を黒戸御所（注：皇居の中の^{いがい} 仏^{くろどの} をまつてある所）に置くこと 40 余日に及び、近江の六角高頼の^{ろっかくたかより} 献金^{けんきん}によって、はじめて^{わづ} 僅かに^{ほうむ} 葬り^{たてまつ} 奉ることが出来ました。まことに大変な事でした。



後柏原天皇

ついで、第 104 代 後柏原天皇が^{ごかしはばら} 踐祚^{せんそ}になったが、即位の大礼をお^{そくい} 挙げ^{たいらい} になる費用^あ がなく、三條西実隆^{ひょう} らの奔走^{さんじょうにしきねたか} で、21 年の後、本願寺の^{ほんそう} 光兼^{こうけん} から^{けんきん} 献金^{けんきん} を得て初めて^ま 大礼^{だいらい} を行われた。朝廷の御事さえ^ま こういう有様^{うさま} ですから、況して万民の上は^ま どんなかとおもわれて、天皇は、

治め^{おさ} する我が代^わ いか^よ かと^{なみかぜ} 波風^{なみかぜ} の 八十島^{やそじま} かけて^い 行く^い 心^{こころ} かな

とお詠^よ みになった。「自分が^あ 治^{あら} めている今の世の^あ さまは^あ どん^あ なであらうかと、波風^あ の^あ 荒^あ い日本^あ の^あ 国^あ の^あ こと^あ が^あ 気^あ にか^あ かって^あ た^あ ま^あ ら^あ ない」^あ いうほどの意味^あ で、御心^あ の^あ 忝^あ さ^あ が^あ よ^あ く^あ う^あ が^あ わ^あ れ^あ ます。

後奈良天皇

次の第 105 代 後奈良天皇の御代は、朝廷の^{ごなら} 衰^{みよ} えが^{おとろ} 殊^{こと} に^{はなは} 甚^{ついち} だ^{どべい} しか^{どべい} った。御所の築地（屋根のある土塀）は破れた^{やぶ} ま^{つくる} ま^{つくる} で、これを繕^か う^か ことが出来^か ない^か ため^か に、賢所^{かしこ} の^か 灯^{とう} 明^{みょう} の^か 光^{こう} が^か 遠^と く^と 三^{さん} 條^{じょう} の^{さん} 橋^{きょう} から^{さん} 見^{けん} え^{けん} た^{けん} と^{けん} いう^{けん} こと^{けん} です。また、紫宸殿^{ししいでん} の^ま 前^ま の^ま 左^さ 近^{こん} の^さ 橋^{はし} の^さ 下^{した} には、茶^{ちや} を^に 煮^に て^に 売^う る^う 者^{もの} も^{もの} あ^{もの} った^{もの} と^{もの} いう^{もの} し、近所^{きんじょ} の^{きん} 子^こ 供^{ども} ら^{ども} が^{ども} 殿^{でん} 上^{じょう} に^{じょう} の^{じょう} ぼ^ぼ っ^ぼ て^ぼ 土^{つち} を^も 弄^も ん^も だ^も と^も 伝^お え^お ら^お れ^お ている。ま^い こと^い に^い 畏^お れ^お 多^い い^い こと^い ながら、皇居^{きんぎょ} は^{きん} 全^{ぜん} く^{ぜん} 古^こ の^こ 面影^{おもかげ} を^う 失^し っ^し て、普通^{ふつう} の^{みん} 民^か 家^か と^あ ち^あ が^あ わ^あ ない^あ よ^あ う^あ な^あ 有^あ 様^{さま} と^あ な^あ った^あ の^あ です。

ご宸筆をお金に代えられる

のみならず天皇は、毎日の御用にすら事^か を^か 欠^か かれる^か ことがしばしばあ^か った^か ので、天皇は御親^{みづ} から^{みづ} 筆^{ふで} を^と 執^と られて、短冊^{たんざく} や色紙^{しきし} に歌^か などをお^{くぎょう} 書き^{さづ} になり、これを公卿^{くぎょう} らに授^{さづ} けて、心^{けんきん} ある^か も^か の^か 献金^{けんきん} と^{けん} 代^か え^か ら^か れ^か た。後には、天皇のお書き^{ひやくにんいっしゅ} にな^い った^い も^い の^い を^い いた^い だ^い き^い たい^い 人^い 々^い は、^い 「百人一首^も 」と^も か^も 「伊勢物語^{いせものがたり} 」と^も か^も の^も 、書^も いて^も 貰^も いたい^も も^も の^も の^も 名^な を^な 書^し き^し っ^し た^し 紙^か 片^せ にお^{ごしよ} 金^み を^す 添^{むす} えて、これを御所^{ごしよ} の^み 御^み 簾^す に^つ 結^つ び^つ 付^つ けて^つ お^つ き、幾^{いく} 日^{にち} か^へ を^の 経^ち て^の 後^の に^の いた^の だ^の き^の に^の う^の が^の う^の と、願^ね い^で 出^し た^{しん} 者^{びつ} へ^{じき} の^{ひつ} ご^{ひつ} 宸^{ひつ} 筆^{ひつ} （訳注：天子の直筆）^{ひつ} だけ^{ひつ} が^{ひつ} 御^{ひつ} 簾^{ひつ} に^{ひつ} かけ^{ひつ} て^{ひつ} あ^{ひつ} った^{ひつ} と^{ひつ} いう^{ひつ} こと^{ひつ} です。後奈良天皇のご宸筆^{ごならしんびつ} が、今日^{けふ} 多^た く^た 伝^た わ^た っ^た て^た り^た ている^た の^た は、その^{その} ため^{ため} です。

ご仁徳

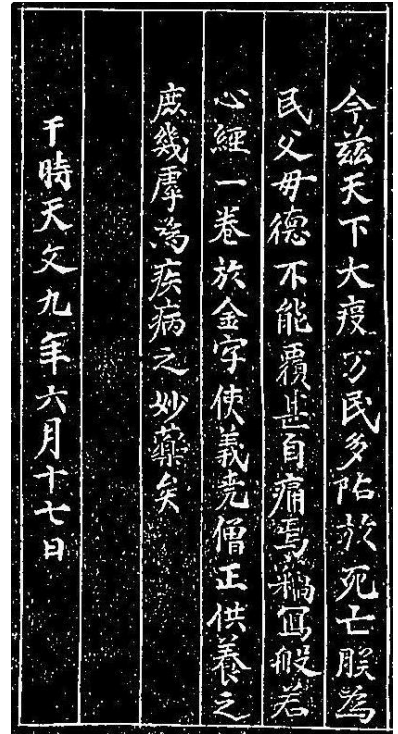
殊^{こと} に^{こと} 後奈良天皇^{ごなら} は^あ 憐^あ れ^あ み^あ の^あ 心^あ が^あ 深^あ く、た^あ ま^あ た^あ ま^あ 少^あ し^あ の^あ 貢^あ を^あ た^あ て^あ ま^あ っ^あ てる^あ 者^あ が^あ あ^あ れ^あ ば、た^あ だ^あ ち^あ に^あ これ^あ を^あ 皇族^{こうぞく}

第11話 京都の疲弊

や公卿らにお分けになったという事です。又、常に御心を万民の上におかれたことについても、特に皆さんにお話しておきたいことがあります。

時は天文8年8月、(後奈良天皇が御年31才で位に即かれてから14年目のこと、)近畿地方に、「100年以來の洪水」といわれたほどの大洪水がありました。この年は一たいに気候が不順で、その上、蝗の害も甚だしかったので、全国一般に凶作でした。従って、年内からすでに食料が不十分だったが、翌9年の春になると、それが一層甚だしくなり、諸国に餓死するものさえ多く出てきたところに、悪病がはやり出して、人々の死ぬものが急に殖えました。

天皇は深くそれを歎かれて、伊勢の神宮に災難除けの祈禱をさせられたが、更に醍醐の三寶院の僧正義堯を宮中にお召しの上、6月17日から5日間、厄病除けの祈禱をさせられた。その際、天皇は紺紙に金泥で自らお書きになった般若心経を三寶院にお下しになったが、その奥書に、「今、天下に疫病が大いにはやって、民の死ぬものが多いが、朕が民の父母として徳が足りないからで、甚だ心苦しい。そこで、ひそかに般若心経一卷を金字に写して、義堯僧正にこれを供養させて、疾病の妙薬となるようにと乞い願う」というご趣旨の文を書き添えられた。御身の窮乏をしのびながら親から経文をお写しになって、これによってわざわいはらい、民の苦しみを除くようにと祈られたのです。万民をいつくしむそのご人徳の忝さには、誰か感泣しないものがいたでしょう。



後奈良天皇の宸筆
般若心経の奥書

なお、天皇は天文9年以後にも、天下の平穩と万民の和樂を祈る御心から、諸国の一の宮にご宸筆の心経を奉納されたが、そのうち肥後、周防、三河、甲斐、伊豆、安房、越後の7か国の分は今もなお伝わっています。

下の臣民は皇恩の篤きに慣れて、自分の勢力をひろめるために御料地をも掠め、貢をもたてまつらないような不忠な事を敢えてしていた。一方で、上の天皇はこれらの不臣をお咎めにならないばかりか、却ってそのために御心を悩まされ、民の父母としての責任をお感じになって、万民の幸福を増進しようとして祈られたのです。まことにありがたいお話です。

朝儀の再興

後奈良天皇は踐祚から10年の後に、大内義隆の献金によって、始めて即位の大札を行われたが、又、乏しいご費用の中からお節約されて、久しく廃れていた朝廷の儀式をも再興された。又、伊勢の神宮の荒れ果てているのをお歎きになって、これを造営(訳注：正遷宮)しようと思われたが、とてもこれはお出来にならないので、伊勢に奉幣使を立てて、その由をことわられた。

第11話 京都の疲弊

慶光院

すると、そのころ、伊勢の宇治町に清順という尼さんがいたが、天皇のみ心に深く感じて、せめては宇治橋（訳注：伊勢神宮の入り口にある橋）なりとも修理し奉ろうと、諸国をめぐってお金を集めて、ついにこれを架けかえた。この事を天皇が聞かれ、特に慶光院の号を賜っておほめになったので、清順はいよいよ感激して、この上は内宮、外宮をも造営してみ心を安んじしようと、勅許を得て広く費用を諸国に募り、浅井、朝倉、武田、北條、斉藤、尼子らの諸豪族からも資金を得て、漸く第106代正親町天皇の永禄6年に外宮を造営して、その9月23日に正遷宮を行わせた。

皆さんもご承知の通り、神宮の社殿は、20年毎に改築して、ご神霊を新宮にお遷しする定めになっているのです。然るに、この時の正遷宮は実に130年目だったということです。いかに室町幕府が政治をしていた時代の世の中が、荒れすさびていたかがわかります。この時には、後奈良天皇はすでにお崩れになって7年目でしたが、定めし地下でお喜びのことだったでしょう。

清順は、なお内宮をも造営奉ろうとしましたが、たまたま病にかかって、永禄9年4月に没したので、弟子の周養がその志をついで四方からお金を集めて、ついに天正3年の3月——外宮が出来てから13年目——に、内宮の造営を成し遂げた。しかし、この時には、すでに織田信長が出でて、近畿を平定し、大いに尊王敬神の実をあらわしていたので、そのご造営には彼も力を添えました。

実にわが国が始まって以来、この時代ほど朝廷の衰えのはなはだしいことはなかったのですが、天壤無窮の皇基はもとより動くべくもありません。却って幕府が衰えたので、諸国の豪族はただちに朝廷に近づき奉るに至り、わが国本来の君臣の道に立ち返ることが出来たのです。

なお、これらの事については後の話で改めて語ります。

（第11話 京都の疲弊 終わり。次は前頁に戻り、第12話 邦人の海外進出へ）